
IS 《ヘタレ》

灰人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS
ヘタレ

【Nコード】

N9266T

【作者名】

灰人

【あらすじ】

クス作者が送るヘタレ主人公のIS学園ライフ

キャラ崩壊あります、ヘタレ無理と言う方は戻るボタンをお勧めします

1話 ヘタレ入学(前書き)

やってしまった・・・後悔はしていない

不定期更新です(キリッ

1話 ヘタレ入学

「コーコーはーどーコーなーんーだー」

取り合えず叫んでは見たが誰も気付いてはくれずため息一つ。

「試験会場は何処へ？」

立ち止まっても始まらないので道なりにそって歩く。

「大体試験会場なんて一緒にするなよ。日本のバーカバーカ」

愚痴をこぼしつつも歩く、そして扉があった。

「キターー。やっと試験会場だよ。神様ありがとう」

俺は扉を開けて中に入った。すると誰もいなくISだけが部屋の中
央に鎮座していた。

「んだよ。ISかよ」

あーあよりにもよってIS学園の試験会場かよ。神様め俺をぬか喜
びさせやがって、恨むからな！

「でも、いまこの部屋には俺一人。別に触っても文句を言われない
・・・
記念に触っていくか、これも何かの縁だし」

俺はそのままISの方へ向かい丁度向かい合う形となった。

「では、失礼しまーす」

一応許可を取り俺はISに触った。するとISと繋がったような感覚が体を突き抜けた。

「ナンジャコリヤー！ー！」

なに俺IS動かせたの！？彼女居ない暦〓生まれた年の俺に？！あ、最後の関係無かった。

俺が起動している間に誰かが入ってきた、誰か助けてください！

「な、これは？！」

いや驚いている暇があったら助けてください！

でも、男がIS起動させたら驚くわな、そりや……

「これで二人目……」

なに言ってるんのこの人達。遠くからだからよく聞こえない。

俺は手を離れたらようやく止まった。体は何もなっていないよな、大丈夫だよな。

「あゝ怖かった。あまりの驚きで心臓が止まると思ったわ」

でも、IS動かしたからどこかの研究室とかに連れて行かれて改造されたらしないのか……

俺嫌だよ、起きたら左手がマイナスイオンドライバーなんて。

「君今から来て欲しいところがあるんだが？」

「え」

キターーこれ絶対改造室送りだよ。起きたらマイナスドライバーは嫌！！

「え、いや、あの・・・すみませんでしたー！」

瞬間的に土下座の形をとり、そのまま頭を床にこすり付けた。

「何を言ってるんだ？」

「改造だけは勘弁してください！お願いします！」

理解不能と言った顔で俺を見下ろす試験官さん。

だがこれは好機と見たこの勢いで乗り切れば許してもらえる・・・
・・・はず。

「改造は、改造だけはどうか」

「いいから来なさい」

どうやら試験官さんは強硬手段と行くそうだ。さよなら俺の青春、
さようなら俺の左手。

試験官さんは俺を車に乗せ、自分も車に乗った。試験官さんの一言
で俺は戦慄したね。

「君にISS学園に入学してもらおう」

「は？」

俺の青春はこうして幕を閉じたと同時に、新たな幕が上がった。

1話 ヘタレ入学（後書き）

感想・指摘待ってます

2話 ヘタレキれる(前書き)

2話目です。

調子に乗って書いてしまった・・・文章が滅茶苦茶だ・・・

2話 ヘタレキれる

IS学園それは女の園・・・らしい。

ぶつちやけた話IS学園なんて俺からしてみれば都市伝説みたいなもんだったし友達にも羨ましがられたが正直これからあんな所で3年間女と一緒になんて正直俺の理性が吹っ飛びそうだった。

「・・・くん。安部双真くん！」

「うひゃあ」

びつくりした。急に声をかけないでください。

「えーと今『あ』なんだよね。自己紹介してくれるかな？駄目かな。できれば早くして欲しいんですけど・・・」

「わ、分かりました」

俺は席をゆつくりと立った。周りを見渡すと、女女女男女女女。ん、男？

他にも男がいた！やったぜ。

俺はガッツポーズを取ったが実際にやっていたらしく周りから変な目で見られた。

「早く言わんか」

《ズバン》

「いったい！」

いきなり出席簿のような物で叩かれ悶絶。後ろには破壊神が仁王立ちでたっていた。

「は、破壊神……」

「何か言ったか？」

「い、いえ何でもありません！」

「さつさと自己紹介をしろ」

初対面の人にこんなに殴れるなんて初めてだな。

ハッ！ まだ睨んでいる。さつさと自己紹介をせねば。

「え、えと雪平双真でしゅ。この学園には初めて入学します。みんなと仲良くにやりたいでしゅ！」

アレ？ 勢いで喋ったら大変な事になったぞ、なんか皆黙ってるし誰か助けてへるぷみー。

『きゃあああああああ』

鼓膜が、鼓膜がああああ。耳をふさぎ損ねた俺はあまりの大音量に気絶しそうになった。

「二人目、二人目ええええ！」

「織斑×安部。イケル」

「神様ありがとう」

「言ってる事無茶苦茶、すごい噛んでる。なんか可愛い」

なんか色々言われているけどまあいいか。早く終わってくれ頼む。
俺は急に恥ずかしくなって急いで座り顔が見えない様に伏せた。

もちろん後で破壊神の出席簿アタックを喰らいました。

自己紹介も何とか終わり（途中叫び声が何度か聞こえたが）今は休憩中。

「これが平穩か。大切にしよう」

心から休もう、十分だけだけど・・・

だがそんな平穩も後ろから声がかかって来て無くなるわけで、

「すごかったな。お前の自己紹介」

「辞めてくれ。アレは俺の黒歴史の中でもトップを争うセリフなんだ。だからあまり触れないでくれ」

「悪かったよ。俺は織斑一夏。よろしく」

「俺は安部双真。よろしく織斑」

この学校で初めて男と会ったような気がする。当たり前か俺等が普通じゃないんだから。

「一夏でいい」

「じゃあ俺も双真でいい。これからよろしく一夏」

なんていい人なんだ俺は初めてこんな良い人に会ったような気がする。

「おい、一夏」

話していると後ろから声をかけてきた、声がしたほうを見ると美少女がいた。

「ちょっと来い」

そう言って一夏を引っ張っていった。

「行ってしまった・・・だが正直この空間に一人は正直はきつい・・・」

見なくても分かる好機の視線、視線なのにどうしてこんなに痛いん

だろうか？

しばらくして一夏達が帰ってくると同時にチャイムがなった。

「終わってしまった」

正直次の休み時間が待ちどうしかった。

現在俺は授業を受けているわけだが中学の時とは大違いだった。ま
ず全く知らない単語がオンパレードで俺の頭もカーニバルだった、
全く分からん。

「先生」

「何でしょうか？安部君」

質問されて嬉しいのか声が上がっている、あれこの人なんて名前だ
っけ？

えーとや・山内だっけか？山・・・思いだせんもう巨乳でいいや。

「どうかしたんですか？」

「全く分からないんですけど」

《ガスッ》

「ぎゃあああああ頭が割れるううう！」

そのまま床に倒れこみのた打ち回る俺。絶対いまでの俺の色々なア
レが死んだ、絶対死んだ！

「まったくどこまで馬鹿なんだお前は。他に分からない奴はいるか
？」

同意を求める織斑先生。

だがこの教室にももう一人の勇者がいた。その勇者は恐る恐る手を
上げ、宣言した。

「先生俺も分かりませぬ」

《ビシッ》

「目があああああー！」

織斑先生は出席簿を投げ一夏の目に直撃させた。先生それはやりす
ぎでは？皆が引いてますよ。

「他には？」

教室内は恐怖で支配され、そこで授業の終わりを知らせる鐘が鳴っ
た。

俺は痛む頭を押さえ戦友の席へ向かった。

「よお、相棒」

「おおっ、まだ目が見えん・・・」

「ちよつとよろしくて?」

なんか声がかかって来た、せつかくこっちは傷の舐めあいをしてい
ると言うのに、

「ん?」

「まあ何ですか!その言葉遣い!」

なんだこのパツキンドリルは、そういう髪型なのか?
このドリルのセンスが理解できんな。

「なにか失礼な事を言われたような気がしますが・・・」

「ギクウ　べ、べべつべ別にパツキンドリルとか言ってますん・・・」

あ

「そ・・・そんな事を思っていましたのね!大体私のようなエリート
中のエリートとクラスを同じになれたこと事態が幸運なのですわよ」

「どうしてエリートなんだ?」

「私は代表候補生、いわゆるエリートですの」

鼻息荒く解説をするドリル。

「ちよつといいか?」

「なんですの下々の民に教えとくのも代表候補生の勤めですから特別にお答えいたしましょう」

「代表候補生ってなんだ？」

《ビシッ》

「あ、あなたそんなことも

」

とここで授業の始まりを知らせる鐘がなった、なんかこの学校の鐘はすごく空気を呼んでくれているような気がするが気のせいだろう。

「また来ますわ」

出来ればもう来ないで欲しいと思ったのは俺だけでは無い……
……はず。

どうやら次の授業はクラスの代表を決めるらしい。
どうせ他の奴がやるだろうと高を括っていたのだが、どうやら俺はこのクラスを嘗めていたらしい。

「織斑君がいいと思います！」

「安部君がいいと思います！」

「俺！？」「」

俺と一夏シンクロ、ホントにいい友達を持ったもんだ。

なんて感傷に浸っていると後ろから耳障りな声が聞こえてた。

「納得いきませんわ！」

やはり来たかパッキンドリル今度は何だ？

「どうして私を差し置いて極東の猿共を推薦するんですか！ここを動物園にするつもりですか?!」

これキれるなって言うほうが難しくない？落ち着け、落ち着けよ双真。

「それに文化的に後進的な国にすむ事自体苦痛ですわ！」

《ブチツ》

俺はドリルの方へ歩いていき胸倉を掴んだ。皆が驚いているが構わずに喋る、我慢できんな。

「さつきからペラペラ良く喋るな、大体イギリスだって大した自慢も無いだろ。」

お前のところは飯が不味いんだよ」

胸倉を掴んでいるため話せないのか口をパクパクさせている。金魚が

「やめろ！」

俺は我に帰り掴んでいた手を離れた。ドリルは肩で息をして怒声を浴びせてきた。

「何なんですかいきなり！」

「別に」

俺は席に戻ろうとしたがドリルに手を掴まれた。

「決闘ですわ！」

「いいぜ、ハンデはどのくらいだ？」

俺が言ったら周りから笑いが起こった。俺何かおかしい事言ったか？

「無理だよ。大体男が女に強かったのってもう何年も前の話だよ？」

「お前ら馬鹿だろ。俺だってISに乗れるんだから条件は同じだと思っが？」

言ったらクラスが静まり返った、そこまで頭が回ってなかったのか？

「話はまとまったな、では来週に代表決定戦を行う。
安部と織斑は後で職員室へ来い」

ここで授業は終わったんだが何か大変な事をしたような気がする・・・

「双真、お前・・・」

「言わないでください。お願いします」

俺はすばやく土下座の体制になり頭をこすり付けた。

「おいやめろって!」

「本当はすごい怖かったです。だからアレは記憶から消していた
だけると有り難いです」

俺は頭を何度も打ちつけ懇願した。一夏は必死で俺を起こそうとして
いるが俺の土下座はそう簡単に破られはしない!

でも俺あんなタンカきつといて負けたらすごい恥ずかしいよな・・・

うがーーーーこうなったら絶対勝ってやる!!

オリキャラ設定(前書き)

なんかニート予備軍を作ってしまったような気がする・・・

オリキャラ設定

名前：安部 双真（あべ そうま）

年齢：15歳

容姿：上の下 顔は良いのでそこそこもてていたのだが性格により彼女が全然出来なかった残念な奴

性格：ヘタレ 怒ると見境が無くなる

特技：土下座 スライディング土下座

好きな物：カレー 昼休み

嫌いな物：差別をしてくる人 ニュルニュルした食べ物

備考

ヘタレでビビリな残念高校生。

名前負けしている事に最近気付いた今日この頃

土下座で何でも切り抜けようとしている世の中をなめるとしか言いようが無い人間

3話 ヘタレ考える(前書き)

まだ色々決まってない・・・

お気に入り登録ありがとうございます！

作者はニヤニヤしているんですけどどうかこれからもよろしくお願いします。

3話 ヘタレ考える

「やっと終わった・・・」

現在破壊神もとい織斑先生の説教から今しがた生還できたのだが問題は山積みである。

ISとかISとかISとか、ああやつぱり怒りに任せてあんな事言うんじゃないかった。あは、あははは。ハア

「ていうかなんで俺もやらなきゃいけないんだよ？」

「そりゃ推薦されたからだろう？」

いまからドリルに謝ってこようとか真剣に迷っていると一夏が名案を思いつたのか俺の肩を揺さぶってくる。う、うぶ、やめろ、一夏。酔う・・・

「ど、どうした？」

「俺たちでISの特訓すればいいんじゃないか？」

「でも俺達って何も出来くないか？」

言われて気付いたのかシユンとなる一夏、俺と一夏はあーでもないこーでもない論争を続けていると

朝に一夏をさらった人とあった。確か名前は・・・

「い、一夏」

「どうした筈？」

ああ！そうだった筈さんね、覚えておこう。

でもこの学校ってレベルが高いよな先生然りクラスの皆然りどうやったら集まるんだって言うくらいいるよな？お前もそう思うだろ読者諸君。

不細工がない学校ってこの学校しかないんじゃないのか？

「ほ、ホントか！？」

む、こっちはこっちで話が進んでいるようだった。なんか筈さんは顔が赤いし何かあったんだらうか？

「別にやってもかまわないぞ／＼」

「双真やったぞ！この筈先生がISを教えてくれるそうだとぞ」

「本当か！？ありがとうございます筈先生」

俺は救世主メシアに大してお礼を言った。途中「二人つきりじゃないのか・・・」とか聞こえたような気がしたが気のせいだろう。

「とりあえずは明日からだ」

「Yes Sir！」

取り合えず軍隊式感じで答え寮へ意気揚々と向かったんだがそこでも問題が起こった。

今日一日呪われてるんじゃないか俺？

「部屋割り？」

巨乳先生そういうことは初めに言っときましょうや。

後から言われたって変なりアクション取れないんだから、一夏に至っては固まっていますよ？

「まだ部屋が空かないので一人か同居という事になります」

おいこら、なに重要な事サラツと言ってるんですか、男女15にして同衾せず。

常識だよな。え、違う？ そうですかすみません。

「何重要な事サラツと言ってるんですか！そんな事初めて聞いたんですが！？」

一夏はようやく帰ってきたのか、早速の抗議。

さすがに言いたくもなるがここは我慢しようぜ一夏。

「当たり前だ私が決めたからな」

ギャーーーーー破壊神。

未だにこの人と話す度に緊張するんだが俺だけじゃないよな？

「千冬姉なに」

《ガスツ》

「織斑先生と呼べと言っただろう」

一夏は拳骨を喰らい床に倒れのた打ち回っている、俺も授業中にやられてたから痛みは分かるのだが
今は一夏に同情している暇はない、俺の平穩を得るために一夏には犠牲になってもらおう。

「はかゲフンゲフン・・・俺一人がいいんですが？」

やば、言ってしまいしそだった、ギリギリセーフ。

だが織斑先生の眉根はつり上がっていき俺に圧力をかけて来る。ヤバイ心が折れそうだ……

俺は涙目になりながらも必死に堪えた。一夏？ 知らん。

「いいだろう。場所は」

織斑先生から場所を教えてもらい部屋へ行く事にした。荷物？もうすでに部屋に運んでいるとの事仕事が速くて俺的には嬉しいのだが、どうも織斑先生は俺と話しているときだけ怖いような気がする。気のせいかもしれないが……

「ついたか」

ようやく部屋の前まで着きの扉を開けてみる。

部屋の中身はどこぞのホテルと遜色ないレベル、当然俺の部屋より

断然きれいだしなにより臭くない。

「これは…ホントにここに住んでいいのか？」

取り合えず部屋の散策。

「この部屋本当にすごいな。まじで俺の部屋とダンチだ」

冷暖房完備、シャワーはもちろんの事。そして一番は…

「ベッドがフカフカだ!!」

俺はベッドにルパンダイブ！ そのまま一人ゴロゴロ転がっていた。

「でもトイレが無いんだよな…」

IS学園は女しかないから当たり前前なんだが、最悪シャワー室でやるしかない。

だが授業中にトイレに行きたくなった場合は…考えたくも無い。

「あ、一夏はどうなったんだ？」

扉を開け周りを見る所したら丁度一夏も部屋を入ろうとした瞬間らしく目が合った。がつつり

「よ、よっ」

「お前隣だったんだな」

「そろらしい…」

一夏はまだ頭が痛むのか頭を押さえていた。ご愁傷様

「じゃあ、また明日」

「おうじゃあな」

俺は一夏に挨拶をして、シャワーを浴びてそのまま寝た。

何時だろうか？ 取りあえず体を起こし携帯を開いてみた。

時刻はもう少しで6時になるつかとという時刻、俺はシャワーを浴び制服へと着替えた。

時間も丁度いいので食堂へ行く事にしよう。

「いざ、食堂へ」

無意味な掛け声と一緒に扉を開ける、そしたら一夏と目が合った。
がっつり

「気のせいかなデジャブを感じるんだが？」

「奇遇だな、俺もだ」

取りあえず固まってもしょうがないので、

「なあ一夏一緒に飯でも食わないか？」

「ああいいぜ。筈も一緒に行くよな？」

一夏は後ろで準備をしていた筈さんに声をかける、返事は良いとの事で三人で食堂へ向かう。

しばらく歩いていると目的地に着いた、どうやらこここの食堂は安いのに味は絶品という場所らしいが俺からして見れば胡散臭い話だ。

取り合えず食券を渡しトレイに乗せてもらった。

因みに俺の好物はカレーだ。

「うまい…」

一夏達も食べ始めるが大体こんな反応。それにしてもこんな初めてたべたな、胡散臭いとか言っすいませんでした！！

飯も食い終わったので俺は先に席を立ち一夏達に挨拶して先に教室へ行く。

「そもそもあのドリルは代表候補生とか言っただけど一般人と何が違うんだ？」

「お答えしますわ！」

後ろから聞いたような声が聞こえてきたが無視する。

「ちょ、無視しないでください！」

「……………ハア」

自然に出てくるため息。

こう言う人は苦手なんだ、しつこい奴は特に。

俺は立ち止まりドリルと向き合う、するとドリルは喜色満面といった表情になるがそんなに説明するのが好きですか？ ドリルさん。

「端的に言うと専用機を持ってるか否かですね」

「ふーん、ありがと」

俺は説明を適当に切り上げ教室へ向かう。

ドリルは説明を切り上げた事に怒っているが、これ以上アイツと関わりたくないのですさつさと教室へ行く事にする。

「あのドリルどうやって沸いたんだ？」

誰にも聞かれないように一人呟いた。

もちろん誰にも気付かれる事なく俺の呟きはクラスの喧騒に消えていった。

「例えば皆さんはブラジャーをしていますよね？」

「ブホオ」

現在授業中なのだが中途半端に聞いていたのだが、何これ！？
ど
ういう状況でしょうか？

「先生。俺と一夏はその…着けて…ないと思う…ですが／／／」

巨乳先生はこちらをみて何が？ 見たいな顔しているが…

「何を着けてないんですか？」

もしかして気付いてないのか！？ もしかして天然？

「その…ブラジャーを」

「安部君聞こえないのですが？」

俺は立ち上がり先生に聞こえるように言った。

「俺はブラジャーを着けてないんです！！ / / /」

静まり返る教室、先生はようやく気付いたのか顔を真っ赤にしている。

クラス中は笑い声に包まれているがこっちは溜まったもんじゃない！

「す、すみません / / / 男の人にはわかりませんよね / / /」

クラスはまだ笑っているが俺は恥ずかしすぎる。

一夏はいつも通りなのだが…

「んん！ 山田先生」

織斑先生の一喝によりクラスにまた静寂が戻る。

あの人本当にすごいな実は人間じゃなかったりして。

今教鞭を取ってる先生って山田先生って言うのか、もしかして恋愛とかに奥手なのか？ いい物持ってるのに残念だな。

「そ、それともう一つ大事な事は、ISにも意識に似たようなモノがあり、お互いの対話 つ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、IS側も操縦者の特性を理解しようとしています」

ISって人間みたいな物なのか？ 唯の鎧にしか見えないんだが…でも動かした分だけ分かり合えるのか？ 人間とは違うんだな、人間なんて一生分かり合えないのに。

「それによつて相互的に理解し、より性能を引き出せる事になるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

「先生それって彼氏彼女みたいな関係ですか？」

それは確かに一理あるな、ISを人間としてみればの話だが。だがもしISに人格という物があったら面白いな。

キーンコーンカーンコーン

「次の時間では空中におけるIS基本制動をやりますからね」

チャイムがなり次の時間の内容を知らせる山田先生。

「ISって言うのは意外と興味深いものかもしれない」

こんな人生でも一回しかないんだ今は楽しもう。

俺はそのまま軽く伸びをする、背骨から小気味いい音が聞こえてくる。

「さあて次も頑張りましょう」

3話 ヘタレ考える(後書き)

オリエントとかいい案があったらお願いします。

よければ詳細な説明を付けてくれればありがたいです！

感想待っています。

4話 ヘタレ驚く

休み時間も終わり授業中なのだが、教壇に立っている織斑先生から連絡を言い渡せれたんだがどんな内容か非常に怖い。

「織斑と安部、お前達のISだが準備まで時間がかかる」

「俺と一夏って専用機でやるんですか？」

「ああ。状況が状況だからな。データ採取などの目的のため、お前達にはそれぞれ専用機が国家から贈られる」

なあんだそんな事がビビって損した。なんて事を思っていたら頭に出席簿が飛んできた……何故？

「お前が馬鹿な事を考えているからだ」

「すみませんでした！ どうぞ続きを」

痛む頭を押さえながら一夏をみるとなぜか一夏は手を上げていた、なんか今までの所で分からないところなんてあったか？

「俺にもわかるように説明してください！」

馬鹿だな〜一夏。もっとも俺も人のことをいえた立場ではないが、一応言っておくがクラスの皆はまた？ 見たいな顔をし、織斑先生に至っては頭を押さえていた。
頭痛だろうか？

「……織斑、予習はしてきたのか？」

「専門用語を覚えて来たんですけど、まだ構造的なモノはちょっと……」

「そうか…では教科書7ページ音読してみる」

「は、はい」

様はこんな感じ。

- ・ ISは世界に467機しか存在しない
- ・ コアは篠ノ之博士以外作る事は出来ず、博士ももう作る事を拒んでいる。
- ・ そのため世界の国家や企業で平等に別け、それぞれ研究開発に勤しんでいる。

とまあ大体な感じなのだが今回俺達が動かすのは特例の為国家から支給が来るとの事。

どうせなら男も全員乗れるようにしてくれば良いのに……そうすれば俺が女子のISスーツをみて辟易する事も無いのに。

「でも『篠ノ之』って何処かで聞いたような気がするんだけど」

女子のヒソヒソ声に耳を傾けるが、そんな奴この学校にいたか？

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか…?」

「そうだ。篠ノ之はアイツの妹だ」

「何をいきなり謝っているんですか!？」

もう疲れた、あなたとの会話。

そっとして置いてくれませんか？ 無理か…

「あの時の事は謝るんで、もう辞めてくれませんか？」

俺は誠心誠意土下座をした、これにはドリルも驚いたようで慌てている。

横から「セシリアさんってあんな事が……」と囁かれているが今は問題では無いだろう。

一夏はもう俺の土下座が日常と化しているのか俺とドリルの応酬をみても平気な顔でノートを書いている

「取り合えず頭を上げてください!」

俺は無理やり起こされドリルと向かい合う形となった。

いいか、俺は向かい合った時に決して「こいつ可愛いな……」とか思っていないからな！ 絶対。

「な、なにいきなり変な事言ってるんですか!？ あなたは?!」

「ん？ 俺何か言ったか？」

「その、かわ…い…いなんてノノノ」

しまったああああ!! 口に出たああああ!!!

「い、いやそそそんな事思ってたねーしい。むしろ」

「寧ろなんだ？」

とここで篤さん登場ありがとう救世主。

あなたはいつもいい所で来ますね、空気を読んでいるのですか？

「寧ろ、篤さん同様かわいって事です!!」

しまったああああ!! またやってしまったああああ!!!!
こうなったら最終手段。

「って一夏が言っていました!」

「なにそれは本当か!? 一夏!?!」

「え、何が?!」

あれこれ状況が悪化してない? 何なんだこの混沌^{カオス}……

「まあ、そういう訳なんだ。ドリル君察してくれ」

「何がそういう訳なんですか!? 今までの事を鑑みてどう察しろ
!?!」

いやそんな剣幕で詰め寄られると…顔が近い……

「あゝ腹減った。飯食いにいこう、うん」

俺は逃げる口実の為食堂に行こうとするが、ドリル手を掴んできた。

Why? 何故?

「逃がしませんわよ。私も一緒に食べますからさっきの事を説明してくれるまで、離しませんから」

「本当にやめてください！！ そんな事したら俺が泣くんで、ほんとやめてもらって頂けないでしょうか」

ドリルのお譲

「あなた本当に許してもらおう気有るんですか！？ 前から思ってたんですがドリルって何なんですか！？ 私にはセシリア・オルコットっていう名前があるんですよ！？」

「あーもう分かったから！！ 詳しい話しは食堂で話しつけましよう。ドリ・・・オルコットさん」

取り合えず一緒に向かおうとするのだがなぜか一夏が宙をまっけたのは気のせいだろう。

「一応確認を取るが、俺達って敵だよな？」

「ええ、そうですね」

なんで平然と言ってるのけるんだよ、俺は女と会話するだけで一杯一杯なのに……緊張でちびりそうだ。

「なんで一緒に飯を食べるてるんデスカ？」

「毎度毎度空気が読めないチャイムのせいで私のありがたい話を聞かせれなかったからですわ!!」

「すみませんでしたああ！辞めてください本当マジで！」

もう嫌、この人怖い…

その後俺はきつちりドリルのありがたーいお話を昼休みが終わるまで聞かされましたとさ。

なんか俺の説明からありがたーいお話にシフトしていたがそこは問題じゃないだろう。

一夏に言われ剣道場へ言ったみたにはいいがなぜか箒さんが一夏へと詰め寄っていた。

「どうしてアイツがここにいるんだ！」

「俺が誘ったから」

一夏に言われ篝さんはこっちを睨みつけてきた。

「すみませんでしたあ！ 俺は他の所で勉強しておくんで二人で楽しんでください」

俺は頭を下げ急いで剣道場を去った。

後ろから「やっと二人きり……」なんて聞こえたが二人きりだった
ら何が有るんだろうか？

「とは言った物のこれからどうしようか……」

大体どうやったら強くなれるんだ？ 勉強をして強くなれる物なのか。
いまいち分からん。

「こついつ時は織斑先生にでも聞いてみようか」

俺はなけなしの勇気を振り絞って職員室へと向かった。

「
というわけなんです」

「……お前の言わんとしていることは大体分かった」

おお分かってくれた。

でもどうして織斑先生は頭を押さえているんだろうっか？

「私はお前を見くびっていたようだ」

「じゃあ」

「お前は馬鹿だ」

なんで馬鹿とか言われなきゃいけないんだ。
じゃあアンタも馬鹿だ。バーカバーカ。

「いいか。ISというのは直ぐに強くなるわけではないんだよ。
努力によって強くなるんだ」

「努力ですか……嫌いな言葉です」

「まあ、そう言うな。取り合えず自分で出来る事をやってみろ」

うまくかわされたような気がするが、この際何も言わない。いえな
いと言っべきか。

「はあ、分かりました」

俺はそのまま職員室をでてこれからのことを考えていた。

「どうしようか？ 取り合えず教科書でも読むか……」

俺は寮に戻り教科書を読む、を当面の目標にした。

途中剣道場から悲鳴が聞こえたような気がしたが気のせいだろう。

4話 へタレ驚く(後書き)

次はいよいよ戦闘です

5話 ヘタレ戦闘する(前書き)

遅れましたすいません。

戦闘描写下っっっっっっっっっっ手ですので心して読んでください。

5話 ヘタレ戦闘する

時間は飛んで一週間後。

なんで一週間も飛ばしたって？ 考えて見る男がずっと机に向かっている描写が延々と続くのなんて誰も楽しくないだろ？ つまりはそういうことなんだ。

「よう、一夏そっちはどうだった？」

「…まあな」

酷くテンションが低い一夏。

見たらなんか痣になってるしとても痛そうだ……

「織斑君と安部君はこちらに来てください」

山田先生に言われるがまま入っていく。

そこには巨大なコンテナが二つ並んでいた。

「デカツ」

「織斑君は『01』と書いてある方で阿部君は『02』って書いてる方です」

まず一夏のコンテナが開き白いISが姿を現したんだがISってこんなにかかったんだな。

「織斑君のIS『白式』です！ 続いて阿部君です！！」

コンテナが空くわけだが何か山田先生のテンションが以上に高い気がするんだが気のせいか？

開いたコンテナから緑色のISが目に入った。

「阿部君のIS『深緑』しんじよくです。そのままですね！」

「…はあ」

山田先生のテンションが異常な程高くまともに応答が出来ない。それを見兼ねたのか織斑先生が奥からやってきた。

「取りあえずは・・・安部ISに乗ってみる」

「分かりました」

俺は言われるがまま深緑に乗ってみる。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する」

装甲の閉じる音や空気が抜ける音がやけに大きく聞こえる。

成すがままに任せているといつの間にか準備が終わり、俺は深緑と繋がった。

「こりゃすごい…」

ISに乗るのは二度目だがあの時以上の感動が胸に突き抜けた。五感の方も優れていて360°見渡せるようになっていたりとか色

々すこかった。

「後は、戦う順番の方だが

」

戦う順番は……

安部双真対セシリア・オルコット

織斑一夏対セシリア・オルコット

安部双真対織斑一夏

一夏とオルコットさんは二回連続でやるのか。

代表候補生って言っても辛いもんは辛いと思うのだが違うんだろうか？

「じゃ行つて来ます」

「頑張つてこいよ」

「逝つて来い」

…… 篤さんそれは死ねって事ですか？

あまりの威圧感に何も言えず俺はピット・ゲートへと進み前傾姿勢を取った

教科書で読んだ操縦方法は自然と頭の中に入って来て、体へと染み込んでいってずっと一緒にいたかのような感覚を覚える。

まだこれで最適化処理も終わっていない初期化状態なのだからこの

フィッティング

フォーマット

後の進化に期待が膨らんで行く。だけどその前にやらないといけない事がある。

俺は飛ぶイメージを浮かべ空へと飛び立った。

「あら、ずいぶん遅かったんですね」

「……待たせてすみませんね」

相對しているのは青いISに身を包み、宙に浮かぶオルコットさん。彼女の方に目を向けるとセンサーを通して情報が流れて来た。

彼女の専用機『ブルー・ティアーズ』。

特徴的なのは右手に携えた長大な銃と背中に装備されている4枚のフィン・アーマー。

反重力装置によって重さの概念をさほど感じない為、今の僕達のように宙に浮かべたりオルコットさんのように自身の身長を越す武器を持てたりする。

やっぱり女子のISスーツってエロいよな。

やばい顔が熱い、どうしようか…

「どうかしましたか？ 顔が赤いようですが」

「何でもありません…ありません」

「そうですか……」

気まずい空気が流れ始めたが、ここで試合開始のブザーがなった。

「最後のチャンスを上げますわ」

「チャンス…だと？」

願っても無い提案だ。

俺は真剣にこの提案を受けようか迷っているとオルコットさんはまた話し始めた。

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで降参してもいいですわ」

「マジで！？ 良いの?!」

「そうですね…って、ええ?!」

「どうかしたか？」

「どうかしたって…あなた本気で言ってますの?!」

本気もなにも痛い嫌だし…ここで嘘を言っても仕方ないし。

「俺はいつも本気だ」

「あなたって人は…そうやっていつも逃げるんですね!」

「その言い方は酷いな! いいよ、やってやるやればいいんでしょ
!?!」

だがこれは挑発だった事に気付いたが時既に遅し。
オルコットさんは『スターライトMK?』を構え撃ってきた。

飛んできた光線は一直線に俺に向かってくる、恐怖に駆られた俺は
スラスターで横に移動したが腕に少しかすったらしくシールドエネ
ルギーが少し減っていた。

ISの競技ルールは簡単に言ってしまうえば操縦者を守るシールドに
使われるエネルギー、所謂シールドエネルギーを相手よりも早く0
にさせた方が勝ちになる。

0にさせるには攻撃するしかないが、威力に比例して実体の方にも
ダメージが通る。そのため破損箇所には大なり小なり影響を受ける。
だがそれが原因で死亡しないように『絶対防御』という半自動機能
が備わっており、大幅にエネルギーが削られる代わりにどんな実体
ダメージも0にする。

でもこのくらいのダメージで『絶対防御』が発動するわけがない。
となると、また痛みを感じていない、ってことか。

「このままじゃ負ける。武器は無いのか!?!」

すると武器の欄が出てきて今使える武器が表示された。

「…遠距離ライフルっておま…」

仕方ないので遠距離ライフルを呼び出す、両手にスナイパーライフ
ルが現れる。

ずしりとした重厚感が手に収まり俺は覚悟を決める。

「やってみるか」

スコープを覗き込みオルコットさんを狙い引き金を引く。
一直線に向かつていく弾丸はオルコットさんを掠める、どうやらギリギリでかわしたようだ。

「私と同じ中距離！？ あなたどこまでも私をコケにしますわね！」

「違う長距離だ！」

そう言って引き金を引くがオルコットさんは余裕をもって避ける。
流石に二度目は通用しないか……

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でここまでほぼ互角にやりあえたのはあなたが初めてですわね」

「…そりやどうも」

上から目線なのが腹立つわ〜
だがこのまま行けばジリ貧だ、しかも相手はまだあのフィンを使っ
てはいない。
アレを使われると思うゾツとするな。

「ですがそれもここまで。ここで閉幕ファイナルと行きましようか！」

四枚のフィンが外れそれぞれ違う動きをしてこっちに迫ってくる。
フィンから逃れようとするがそれぞれが動きを先回りして逃げられ
ない。

ピキユン ピキユン

ピキユン

ピキユン

タイミングをずらしながら撃ってくるレーザー光線にことごとく被弾してしまい集中力が途切れなすがままになる。

「これで終わりか…悔しいな」

初めてだこんなに悔しいと思ったことは。初めてだ負けたくないと思っただのは…

「終わりですわ！」

四枚のフィンが俺を囲むように並び一斉にレーザー光線を発射させた。

爆風がおこり自分の負けを悟ったが、

「…終わってない？」

フィッティング
最適化処理が終了しました。

見るとISの姿が変わり色も更に濃い色になったような気がした。

「まさか一次移行！？今まで初期設定の機体で闘っていたというの

！？」

「…まだ戦える」

俺はその感動をかみ締め気を引き締める。

今度は武器の欄が自動的に出てくる。

遠距離ライフル『砕羽』、両肩と両手に装備された遠距離エネルギー弾『虚空』。
俺は『砕羽』を呼び出した。

「ケリ着けようぜ」

「望むところですよ！」

フィンを飛ばしながら攻撃してくるが俺は『虚空』を撃ちだし応戦する。

俺は一旦距離を離し、スコープを覗き込む。

「狙い打つ！」

こっちに近付いてくるオルコットさんに引き金を引く。

さっきとは比べ物にならない程の速さで弾丸は飛んでいき直撃した。

「まだいけますわ！」

相当なダメージを食らった筈なのにまだ余裕そうなおルコットさん。フィンを動かしながら近付いてくる、二枚のフィンが近付いてきて牽制するが『虚空』を撃ちながら避けていると一枚のフィンに直撃した。

「残り三」

もう一枚のフィンを『砕羽』で打ち落とす。
流石に焦りはじめたらしくフィンを引っ込め『スターライトMK?』を構える。

「そりゃ悪手だ」

狙いを定めているらしいが、俺は『砕羽』を引っ込めた。両手をかざし四つの砲門から『虚空』打ち出す。

「クツ！」

「ボサツとしてんなよ！」

必死に避けているが尚も打ち続ける。

避け続けてスラストゲージが無くなったのか急に動きが遅くなった。

『砕羽』を呼び出し狙いをつける。それに気付いたオルコットさんも『スターライトMK?』を構え狙いをつけている。

「これで終わりだ(ですわ!)」

タン ピキユン

同じタイミングで放たれた銃弾は対なる相手へと向かっていく。

疲労感に襲われ視界が霞む、目の前に光線が迫ってくるにも関わらず避けられなかった。

勝者セシリア・オルコット

「負けた…」

気を抜くのもつかの間シールドエネルギーが0になった事によりそのまま地上へと落ちていく。

俺死ぬのか……短い人生でした。

「何勝手に死のうとしてるんですか!？」

オルコットさんに抱き抱えられる、こっぴつこっぴつって良いもんだな。

「ああ天使って言うのはこっぴつ奴なんだろうな……」

「な、なに言ってるんですか／＼」

もう疲れたお休みなさい。

俺はゆっくりと瞼を閉じ、暗闇へと落ちていった。

5話 ヘタレ戦闘する(後書き)

ここまで読んでいただいた方誠にありがとうございます。

6話 ヘタレ目をつけられる(前書き)

ひさしぶりの投稿なのになんという短さ…:すいません!
それにセットで駄文がついてきます。

6話 ヘタレ目をつけられる

目を開けると白い天井が目に入った。

どうしてここに居るんだ？ もしかして戦闘が終わった後にここに運び込まれた……とかか？ 分からん。なぜか意識が途切れる前になんか恥ずかしいことを言ったような気がするが全く思い出せない。

「やっと起きましたわね」

「お前……ドリル……か？」

「……はあ」

なんだそのため息は……俺はなんにも悪い事は言っていないはずだ！
誰かそう言ってくれ！！ 頼む！！

「君は悪くないよ。悪いのは全部あの自称代表候補生何だよ。（双
真裏声）」

「そ、そうなのか？」

「そうだよ。元は言えば彼女がぜんぶ」静かにしてもらえませんか
？「ウヒィー！」

な、なんだこの重圧プレッシャーは！？ どこから発生しているんだ？！
よく見てみると鬼が居た……金髪の般若が仁王立ちしてました。

「お、おれを食ったてなんの栄養にもならないよ！ うん、ならな
い！！」

「貴方つて人は……あの時はあんなにかっこよかったのに……」

「？ 何か言ったか」

「い、いえ何でもありませんわ」

なんだなんだ変なやつだな。といつてもこいつはいつも変だがな。
……今良いこといったな俺。

「で、何しにきたんだ？もしかして俺を笑いにきたのか？」

「い、いえ違いますわ。ちょっとしたお見舞いですわ」

「じゃ、もう終わったな。帰れ」

「ええ！？ そんなもう少し「すまん。一人にしてくれ」……分か
りましたわ」

言ったら渋々ながら出て行ってくれた。やっと一人になれる……

ベッドの中に潜り込もうとしたら勢いよく扉が開けられた。

「今度は何だ？！ 鬼か？ 悪魔か？ いや違う、織斑先生だ！！」

「なにを言っている馬鹿者！」

頭上に出席簿が流星群のように降ってきて……あれこな「馬鹿が」

ドスッ！

「がっ！？」

イテエ…これ絶対本気だ《マジ》だ本気と書いてマジと読むアレだ
……
本気のボディブローが俺の腹を貫き、しばらく息が出来ずにベッドの上でうずくまっていたが、

「さっさと起きろ」

え……今なんと？

ちよつと……なに無言で出席簿構えてるんですか？ その尋常ではない殺気は？！

「お…おきまじだ…」

「うむ」

意味がわからず上体を起こし、織斑先生と向かい合う。

「とりあえずは大丈夫なようだな」

全然大丈夫ではありませんか？ 主に貴方のせいで……

「で、なんですか？」

「深い意味はないが、気絶したというので状態を見に来ただけだ」

そう言って早々に部屋を出て行った。だったら別に殴る必要なくね？

「そついえばISってどうなったんだ？」

体を調べてみると、首に何かがかかっている。

手に取ってみるとネックレスだった、達筆で『緑』と模られていた。

「これからよろしくな。深緑」

僅かに光ったような気が気のせいだと思い目を閉じた。

はい皆さんこんにちは。

俺こと安部双真はただいま空を飛んでいます、ISに乗るのはこれで……何回目だっけ？ まあいいや。

とにかく一夏とドリルと俺の三人で空を飛んでいます。

「えーと、角錐をイメージする感じだっけ？」

む、どうやら考え事をしていたら勝手に話が進んでいる。俺も会話に参加してみる。

「いやいや。ジェット風船を飛ばす感じだつて一夏」

「そ、そうなのか？」

「そうなんだ」

早速やり始めたのか無言になる一夏。その隙にドリルが話しかけてきた。

「本当に大丈夫なんですか？」

「知らない。適当に言ったただけだし」

しばらく話し込んでいたが、突如として一夏の姿が消えた事に気づいた。

どうやら普通に飛ぶのが飽きたのか加速してどこかへ消えたらしい、怖い話だ。

「消えたんですけど!？」

「俺し〜らね(笑)」

なんて会話をしていたら織斑先生から通信してきた。

『三人とも急降下からの急停止をやってみろ。目標は地面から10cmだ』

なんちゅう無茶振りだ……だが以前にもやっているのかドリルはなんてことのないように答える。

「お先ですわ」

え……もう行くの？ 早くない……？

言うが早いが既に下へ降りて言われていた事をこなしていた。
できる人はすごいです……

「俺もやってみるか……な」

覚悟をきめ一気に地面へ向かう！

ジェットコースターで一気に降りるような感覚が襲い掛かってくる。
ドンドン地面に近づいてきて、恐怖に駆られた俺は指示通りの急停止をした。

「っつおー！」

危なかった……もう少して地面とキスする羽目になっていた。
織斑先生を見ると、

「……まあいいだろう」

よかつたとりあえず及第点をもらいホッと胸をなでおろす。
できればもう二度とこんなことやりたくないが……無理か……ハア。

「がんばれ一夏」

まだやっていない一夏を応援する、聞こえてないと思うがな。

一夏も言われたとおり、結構なスピードで降下していく。
だが停止するタイミングがわからないのかそのまま地面へと墜落？
してしまった。

「一夏ー！」

「織斑君！」

篠ノ乃さんと先生達が一夏のもとへ向かっていく。

いいなあ、俺もあんな風に心配されたいなあ…一夏め羨ましい…

「そ、それなら……私が……」

「は？」

「い、いえ……なんでもありませんわ！」

するとドリルはいつの間にかISをしまい、女子たちの所へ向かっていった。

「俺もISをしまつか」

ISをしまい先生たちの指示を待った。

「いや〜さっぱりした」

あ、今は学校といっても授業が終わりシャワーを浴びてたところで
す。

言葉足らずですいません。……誰に謝ってんだ俺？

「俺ってこの学校でやって行けてるんだろっか？」

いまさらながら不安になる。

しばらく考えていたが、誰かがノックしてきたので扉を開け来客を迎えにいった。

「なんだドリ…オルコットさんか」

「貴方は…まあいいですわ、今に始まったことではないですし。…とりあえず、食堂でクラスの皆さんとパーティのをしますからついてきてください」

俺の手を掴んで強引に掴み連行していく。

いきなり手をつかまれ思わず顔が熱くなってしまっ、素直に恥ずいぞこれは…

「じ、自分で歩けますって！」

自由な方の手でドリルの手を離そうとしたが思わず手に触れてしま
い、

「「あ」「

同じタイミングで声をあげ、同じタイミングで手を引っ込めてしま
う。

「「……」「

気まずい空気が流れ始め、とりあえずはこの空気から一刻も早く抜け出すために早足で食堂へ向かう。

「ま、待ってください」

俺の後ろについてくる、お互いに顔を見えないこのときがチャンスだと思い振り向かずドリルに話しかける。

「あの時はすまなかった」

「え？ いつの話ですか？」

「いや、ほら……オルコットさんの胸倉を掴んだ時の」

「そんな事もう気に「違うんだ」……」

それも有るけど、そんなことじゃない俺はいろいろオルコットさんの……うが……上手く言葉にできない！！

俺は振り向き頭を下げた。

「格好悪りな。あんなこと言って負けたりして……上手く言葉にできないけど……とりあえずすまなかった」

「そんな……いきなり……ずるいですわ」

そんな呟きが聞こえ頭を上げると真っ赤にしたオルコットさんと目が合った。

「言いたいことも言ったし行こうか。オルコットさん」

「セシリア、ですね。双真さん」

……えーととりあえず名前で呼んでいいとかそんなか？

「あーと、行こうかセシリア／／」

「はい！」

急いで食堂へ向かう。

もちろんくるのが遅かったとかで無茶苦茶冷やかされたのは、言うまでもない。

その翌日一夏に会うといまだにクラス代表がどうかゴチャゴチャ言っていたので仕方なく聞いていると、面白い話を聞いた。

「そつだ二組のクラス代表が変更になった聞いてる？」

「ああ何とかって転校生に代わったって」

「転校生？ 今の時期に？」

まあ確かに中途半端ではあるな、うん。

「フン、私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

尊大なポーズで、そんな事をいうセシリア。それは絶っつっつっつ
つっつっつっつ対違うと思う。

それにしみじみ思うんだけどこの性格が無ければ普通に可愛いのに、
この残念な性格のおかげで色々駄目になってるんだと思う。

「今のところ専用機を持つてるのって1組と4組だけだから余裕だ
よ」

「その情報古いよ」

みんなが一斉に声のした方向を見るとちっこい女子がいた。

「今誰かちっこいって言わなかったかしら？」

……どうやらちびっ子は地獄耳らしい。

「まあいいわ。中国代表候補生、ファンリンイン鳳鈴音よ！ 今日
は戦線布告に来
たってわけよ！！」

効果音がついたらきつと《ドーン》とか《ドカーン》とかなんだろ
うな……効果音が一緒なのはご愛嬌。

「お前鈴か？」

一夏は立ち上がり、旧友に会えたことがうれしいのか若干テンションが上がっていた。

「お前何かツッコつけてんだすつげー似合わないぞ」

「一夏例えそれは合っても言ってもはいけない」

俺はちびっ子をフォローしたんだがなぜか睨まれ、

「なんてこと言うのよアンタはぁ！特にそこのお前！」

「お、俺っすか?!」

「アンタ以外に「邪魔だ」……え？」

ギギギギと効果音がつきそうな程の振り返り方だった。だが面倒なことになった、また変なやつに目をつけられた……今はセシリアだけで十分お腹一杯なのに……

「また後で来るからね逃げないでよ一夏。お前もね!!」

コエエエエエエエエエエエ!!

急いで逃げる準備をしなければ、俺の命に関わってくる!!

とりあえずはSHRが始まったのだが、例のちびっ子がいつ来るか気が気でなかった。

6話 ヘタレ目をつけられる(後書き)

遅れてすみませんでした。

7話 ヘタレ絡まれる(前書き)

皆さんお久しぶりです。ようやく内定をもらえて一先ず安心したところでは。

今回はまあ久しぶりの更新という訳です。

かなり間があいちゃってるんで文章とかは気にしない方面でお願いします。

ではお楽しみください

7話 ヘタレ絡まれる

さて授業が終わった……俺がこれからすべきことは……

ちびっこから逃げることだ

思ったら即行動。俺はダツシユで教室を飛び出しそのまま宛もなく走り出した。気分は盗んだバイクで走り出した感じだ。

「あんた何してんのよ？」

……イマノコエハ、ナンドロウカ。

聞こえない振りをしてそのまま走り出したが奴は簡単に俺に追いついた。

「あんたにも用があるんだから一緒に来なさい」

「いやだ！ 俺にはまだやり残した事があるんだ」

「うるさいわね。言う事聞きなさい！」

そう言った瞬間ちびっ子は俺の首をつかみ無理やり停止させた。急に止まったおかげで俺の首に多大な損傷を負ったのは内緒。

「や、やめてください。お願いします！」

「ああ？」

「…なんでもごじやいません…すいませんでした」

反射的に謝ってしまいそのまま引きずられる俺。これからどこへ行くんだろつか…暗い未来を想像した俺は肉親に別れを告げたあと瞳を閉じた。

「…………おきな…」

ああここは天国かあ…でもなぜか体の節々が痛いなあ。

「起きろって言うてるでしょうが!!！」

「グフツ」

腹に強烈な一撃が来た。一気に覚^{おめ}醒めました。覚^{おめ}醒めると言っても決してM発言じゃないんでお願いします。

「痛ってーな！ 殴ることないだろうがバーカ！」

「あんたいつからそんな生^{なま}言えるようになったの？」

「……………すいません。もう生意気言いません……………」

…恐いこの人…もういや…………

「さっさと中に」「よう鈴！」「…ああ」？

ちびっ子が俺を食堂へ入れようとした時、一夏が声をかけてきた。助かった……ありがとう一夏！

「一緒に飯食わねえか？」

「いいわよ。ほらさっさと歩け」

…俺は首根っこを掴まれそのまま引きずり込まれていく。

俺って確かこの小説の主人公だよな……？

「双馬そついう発言は、メタ発言って言って駄目らしいぞ」

お前はなんで俺の心を読んでいるんだ！ やめるマジで、俺は今触ったら確実に死ぬハムスター並みにデリケートなんだぞ。

「ほら早く自分の受け取りなさい」

「あ、すいません」

俺は言われた通りに飯をトレイに乗せて二人に着いていく。そして今まで気づかなかったがセシリアと篠ノ之さんが後ろにいた。篠ノ之さんは姐さんの事が気になってるっぽいけど一夏と姐さんの仲が良すぎて間に入れてない。

「ソウマさん」

「ん、なに」

「さつきは何故逃げ出すように教室から出ていったんですの?」

おうふ…このドリルはいきなり聞いてきやがったよ…

「あーと、ほらあれだ。万引きした少年が店から逃げる感じだよ」

「…意味がわかりません」

「分からなくていいよ…それ以上聞いたらダメだから」

もうね…なんかね…おうちに帰りたい…

「何そこで固まってんだよ。お前らもこっちにきて一緒に食おうぜ」

一夏よ空気を読んで欲しい。傷心中というか絶賛ホームシックな俺と変なドリルとずっとモジモジしてる篠ノ之さんを見てお前は何も思わないのか！ バカ！ アホ！ マヌケ！

それにチビッコがきたら殺すみたいな視線でこっちを見ているわけ
で気づけよ鈍感。

「セシリアと篠ノ之さん。指名が入ったから行くこうか」

「…そうだな」

「そうです…わね。本当は二人で良かったのですが…」

もういい…なにも聞こえない。俺は心のスイッチをオフにして二人の席に近づき腰を下ろした。

席には座ったが俺は話に入る気にもならず無心にカレーをかきこ

む。

「あんだ、ねえ聞いてんの!?!」

「…え、俺?」

「あんだ名前なんて言うの?」

「…なんて呼んでも良いですよ別に。多分貴方とは関わらないと思いますから…」

「アンタねえ人が親切に聞いてあげてるんだから答えなさいよ!」

バン! と机を叩き身を乗り出して俺に顔を近づけてきた。なぜか俺にはその顔が鬼に見えて体中から変な汗が出てきた。

「…すみません。調子に乗ってました。安部双真っていいです。生まれてきてごめんなさい」

恐怖感に駆られ名乗ってしまった。周りを見ると篠ノ之さんが虫を見るような目付きで俺を睨んでいた。特定の人達がやられたら嬉しいだろうが、俺には残念ながらその気がないからただその目をみてもガクガクと震えるだけだ。

「ふーん、アベソウマねえ……確かアンタも専用機持ってるんですよ?」

「お、おい鈴!」

一夏よ居たのか。さっきから全然声を発さないから死んだと思った

ぞ。

「一応持ってますけど……」

「本当に持ってるんだ」

何か嫌な予感がする……他の三人もそれを感じ取ったのか、皆一様に顔を背けていた。

俺はというとチビツコが何を言い出すのか、待っていたら案の定とんでもない無いものだった。

「アタシと戦いなさいよ！」

「やだ！　つてか一夏とかセシリアとかいるだろ！　なんで俺なんだよ！！！」

ふざけんなよマジで！　ビームとか食らったら痛いんだぞ、チビツコえらいにはそれが分かりますのです」

「あ、あんたねえ！　ぶっ殺してやるわ！　覚悟しときなさい！」

「ハア！　なんでだよ！　なんで俺が無意味に殺されなきゃなんないんだよ。良いよやってやる、後で吠え面かくなよ。バーカバーカ」

「そっちこそ泣いて謝っても許してやらないだから！」

まったくイライラする。俺は勢い良く席を立ち食器を返却口に返し、そのまま大股歩きで食堂を出ていった。

「……ハア……もうやだ家に帰りたい……」

ただいま屋上で自己嫌悪中。

また勢いであんなこと言ってしまったけど……やりたくない……もしかしたら死ぬかもしれない、ついそんな事まで思ってしまう。

大丈夫かもしれない。でも世の中には”絶対”なんて言葉はない。現にほかの国はISを戦争に投入しているところもあると聞いた。俺はもしかしたらとんでもないもの選ばれてしまったのか……なんて思ってしまった。

でもこの話を聞いたクラスの皆の反応は淡白であり、まさか自分がそんなことに巻き込まれるはずが無いとでも思っているような顔だった。

俺は声を大にして叫びたかったが、俺にそんなことが出来るはずが無くただ黙って心の中で叫ぶことしか出来なかった……初めて自分がこんなにも弱いと感じたことは無い。

ただ一言「お前たちは人を殺してそんな顔が出来るんですか？」問いかければ良いだけなのにそれすらもできない自分が憎い。

「こんなところにいたんですね……」

「セシリア……」

セシリアずっと俺を探していたのか少し息が上がっていた。

「こんなところで何をしていたんですの？」

「……放課後にやる試合の作戦を練ってた」

「一人……で？」

俺は首を縦に振って、ベンチの方へ向かい腰を下ろした。

「勝てるんですか？」

「……十中八九負けるだろ。相手は代表候補生だし……」

「まあ、そうですね……」

「ありがとな」

「な、なんですの！ いきなり！」

「む、少し気が楽になったから……礼をいったつもりだったんだが……」

そんな反応されると辛いな……。兎に角前の戦闘みたいに入まだけはないように頑張らないとな！

「もうすぐ授業はじまんぞ。行くっぜ」

「そうですね」

俺とセシリアはベンチから立ち上がって教室へと向かっていった。

7話 ヘタレ絡まれる(後書き)

感想・指摘があればどんどん書いてください。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9266t/>

IS 《ヘタレ》

2011年12月4日23時53分発行